

DOJIN
R18
成人向け

18歳未満の
購入・閲覧禁止

忍者

と
作
つ
た

ゲームの会社

添牙いろは

Soekiba Iroha

イラスト：ターヤ



これは、公認浮気といふべきか、同伴浮気といふべきか。

いや、決して気持ちが悪くはない。僕の心は、いまでも恋人一筋である。

しかしながら……

「あらかじめゆつときますけど……妊娠してもあたしたちは知りませんからね。個人の自由で産むなり何なり……そこはちゃんと伝えてあります？」

その恋人は妙に突き放したことを言いつつも、それをやんわりと許容している。その……まさに、そのようなことになりかねない行為を。

「だ、大丈夫なはず……だけど……」

その結果には至らない、と本人より聞いてはいる。

が、その過程を執り行うことには違いない。

恋人ではない他の女の人の人に対して。

その現場に、僕は交際相手連れて行こうとしている。

他でもない交際相手たつての希望で。

とはいえ、もちろん条件はある。

「……おっと、そちらから人が来ますから……時間も時間ですし、そのマンションで待機しておきましょうか」

かなりの深夜とはいえ、終電はもう少しだけ先だ。駅が眠っていない以上、利用客の出入りもある。

そんな時間帯だというのに……僕たちは何も着ていない。靴だけは履いているけれど。

彼女と付き合い始めて一〇年か。さすがに慣れてきたとはいえ、人の気配を感じれば緊張もする。

だというのに。

「ふふ、このカッコで出ていったら絶対驚くでしょうねえ♪」

待ち合わせ場所は目と鼻の先の駅前広場。僕たちが隠れている駐輪場を出たらすぐである。だから、彼女はそれが気になって仕方ないらしい。

「この通りに人はいませんし……ちゃんと来てるか、ちょっと覗いてみましょうか」
彼女がそう言うのなら、間違いないのだろう。人目のない範囲で再び路上へと踏み出し、建物の陰に隠れながら明るい街並みの方へ肩から上だけ乗り出してみた。

すると――

「な……なんですかアレ……!! あの人、一体何を考えてるんです!?!」

忍者と作ったゲームの会社

添牙いろは

警察に捕まったらどうするんですか！ ……と、礼菜^{れいな}は叱りつけているが、素っ裸では残念なくらいに説得力がない。僕自身も、このように怒られることは度々あったが…：彼女は、可愛らしすぎる。学生の頃など、高めに結いたツインテールだったため、その様相はまさに気取った子供。その、控えめな体型も相まって。大学を卒業してから髪は結び目も低めに下げているが、可愛らしいことには変わりない。

だから叱られている方も、本来はここまで深々と恐縮することではないのだけれど。「申し訳ありません…：申し訳ありません…：」

白い背中から丸い尻まですっかり見えてしまうほどの全裸土下座。襟元に届くくらい黒いボブカットから、謝罪の言葉が繰り返される。が、顔を上げた優加^{やさか}さんの瞳に反省の色は見られない。路上で全裸土下座、という自分の痴態に酔っているのだろう。これは、なじればなじるほど逆効果だ。それに気づいてしまえば、礼菜もお説教を諦めざるを得ない。

「はあ、せめて合流してからにしてくださいっ！」

あれから駅も閉まり、そうなると人の流れはほとんどなくなる。ここは、表通りからちよつと入った閑静な街角。マンションの植え込みのフチに座って、僕の恋人は健気に劍幕を振り撒いていた。

さて、先程の駅前広場で僕たちが目撃たものは……肌色一色で自ら横たわり、魅せつけるように両足を開いている優加さんの無茶っぶりだった。

「マズイですよ、止めてください！」

「でも、どうやって!？」

僕も礼菜も全裸である。男たちに囲まれた優加さんをどうやって救い出せというのか。

「コースケ君、お願いします！」

「警察呼ばれるぞ!？」

自分で言うのもなんだが……全裸女ならまだしも、全裸男が人前に飛び出そうものなら通報は必至である。そのように訴えてみるも——あまりにこのようなことを繰り返す過ぎてきたからか、僕もすっかり忘れていた。

「あたしが男の人の前に出られるワケないじゃないですか!？」

礼菜は、周囲で動いている気配を察知することができる。その才のおかげで、これまで一〇年以上全裸で街を徘徊してきたが、他人に見咎められたことは一度もない。僕や、露出仲間たちを除いて。このような夜の全裸散歩は習慣化しているものの、それをまったくの部外者に、ましてや男に視姦みかんられて平気なはずがない。

とはいえ、平気でないのはこちらと同じ。だが……

「交番にも動きはなさそうですし、いまならまだ間に合います。大丈夫です！」
何も大丈夫ではないけれど、本当に大丈夫じゃなくなる前に僕は諦めて決意を固めた。こんな恋人と付き合っているのだから、多少の危険は覚悟しなくてはなるまい、と。

そんなやりとりがあつて……幸いなことに、男たちの視線が優加さんに集中していたこともあり、僕らの公然猥褻に対して警察に訴え出る人はいなかったようだ。

しかし、数え切れないほど屋外で破廉恥行為を繰り返してきた礼菜でさえ、ここまでの窮地はなかったらしい。また同じことをされては敵わない、とお説教が始まってしまったのである。

とはいえ。

「ま、まあ……そのくらいにしといてくれ……」

仕事の付き合いもある相手にあまり長々と性癖を披露しないで欲しい。何だかんだで、彼氏たる僕の世間体にも跳ね返ってくるから。

こういう状況だけに、礼菜の機嫌を取り持つことは難しくない。右側からそつと隣へ寄り添い、腰を抱くように向こう側の胸へ左腕を伸ばせば――

「はうん♥」

控えめな乳房を手の平に収めると、礼菜はピクリと身を竦ませる。そして膨らんだ蕾への愛撫に甘えるように……重さを僕の方へと傾けてきた。こちらからの穏やかならざる指先を期待しては、もう膝を合わせてもいられない。恋人は、僕を求めてゆつくりと秘所を開かしていく。実家で暮らしていた頃は絵のモデルになる都合で剃ったり伸ばしたりしていた下の毛も、同棲を始めてからは綺麗に生え揃っていることの方が多くなった。とはいえその密度は控えめで、割れ目へと薄く流れ込んでいる。その内側はしつとりと蜜を湛えており、すべてを飲み込み、溶かしてしまいそうだ。誘われるように、そこを軽く挟じ開けてみると――

「はう……んふう……はあん……」

呼び込まれた先の窪みは、挿入^{はい}ってくるものをぬるぬると滑り導いていく。礼菜自身も、もつとも欲しているその場所へ。

「はあつ、うん……はふうん……ソコ……ソコ、好きですう……♥」

気持ち良くしてくれるお礼とばかりに、女のコの右手も僕の股間からそそり勃^た起つモノへと添えられた。

「はう……はうう……あうう……♪」

触れ合えば触れ合うほどに、より求めてしまうのが恋人である。顔と顔を近づけたところで……チロリと差し出された舌に、僕もまた舌を合わせた。口の外で淫猥に。

目の前の相手へ魅せつけながら。

しかし、魅せつけられる方も……自他共に認める、変態女である。第三者からそのように断定できるのは、彼女自身にそう書いてあるから。胸と胸の合間に、二度とは消えない文字で『変態女』、と。肌に彫り込まれた線はそれだけではなく、乳首の周りには乳輪に合わせて女性器の記号。一方、下腹部には、まるで挿入されたものが透過しているように男性器が描かれ、その両脇には『中出し』『歓迎』と記されていた。これらを自ら望んで刻み込んだというのだから、その変態性は常軌を逸している。

先程までは、土下座という形で背中しか見えていなかった。が、礼菜からの叱責が止まったことで、頭を上げたのだろう。いまでは礼菜を視姦するために上体は起こされておき、優加さんの危険な自己主張が再び僕らの前に開かされてしまった。

そんな変態女であるのだから、自らの快楽のためには妥協がない。ここまでは外したまま手に持ってきた黒いウエストポーチから取り出したのは――

ヴァンヴァンヴァン……

その音で、礼菜も優加さんが勝手に楽しんだことに気づく。が、それを咎める様子はない。チラリと一瞥するが……その視線はすぐにこちらへ戻ってきた。いまは、

自身の官能を楽しむ方が大切らしい。

なので、優加さんも遠慮なく。

「バイブ……マンコに挿入れちゃう……」

ヴィンヴィンというモーターの響きが、ムンムンとくぐもったことで、その動きもよくわかった。彼女はもう正座をしていない。すっかり仰向けになって、こちらへ大股を開いている。その、挿入さっているところがよく視姦えるように。

「ケツマンコも……あつ、あふう……」

もう一本を求めて、すぐさま四つん這いに。お尻をこちらに向けて、二本のバイブをズブズブと前後させている。

「あふつ、あふうん……マンコもオケツもグチヨグチヨお……ふあん……♥」

そんな痴態をこれ見よがしに突きつけられて、僕も礼菜も手淫などでは物足りなくなってきた。

「コースケ君、あたし……欲しいです……♥」

どのように求めるのか、僕は彼女に身を委ねる。すると……お尻を上げた礼菜はすぐ隣の僕の上に着地。僕の両足を閉じさせ、跨りながら。どうやら礼菜も目下の相手へ魅せつけたいらしい。

「は……あう……はう……はうん……」

ソコの濡れ方は、僕のこの指でよくわかっていた。いや、本懐がすぐ傍まで迫ってきたことで、より潤ってきたのかも知れない。手を添えて誘導する必要もなく、硬いところと柔らかいところは、求め合うように混じり合っていく。

「挿入はいったあ……挿入はいりましたあ……♪」

そう呼びかけるのは当然目下の相手。そして、魅せつけられる方も黙ってはいない。「ワタシも……視姦みかんてくださいあい……マンコも……ケツマンコもお……」

僕たち、結構派手にやってみてしまっているな。すぐ背後には一階の部屋があるわけだし。それでも礼菜がこうして楽しんでいるということは、住人は寝入っているということなのだろう。

「はうん、はっ、あっ、ああ……♥ 本物お……本物気持ちですう……♪」

こんなに強気な礼菜は珍しい。もしかすると、自分より凄まじい露出行為を魅せつけられて、対抗したい気分なのだろうか。当の本人に、そんなつもりはなさそうかどうか。

「視姦みかんてえ……だらしのないガバマン視姦みかんてえ……♥」

両手で交互に挿入はいれたり引いたり。ひたすら股間を魅せつけるばかりで、こちらのことなどお構いなしだ。こうして、恋人同士の秘密のプレイに割り込んできたのだから、僕が欲しいことには間違いない。だが、いまは視姦みかんされたいのだろう。異性であ

る僕だけでなく、同性である礼菜にさえ。あえて、明らかに僕のモノより太いものでグイグイと拵がっていると。

優加さんは、駅前の様子から察するに……別段、外でなくても良さそう。外であっても構わない、というだけで。

だとしても。

外で一緒に裸になり、一緒に性感^{カセン}じてくれる仲間がいるだけで、礼菜はどこまでも敏感になつていく。

「あつ、ああ……コースケくん……絶頂^{イッ}ちやいます……射精^だしてください……」

礼菜の動きがラストに向けて激しくなってきた。これは僕から搾^{しぼ}精^{せい}り出すための腰つき……!!

「ワタシもお……絶頂^{イキ}ますう……♡」

お尻の向こうから幸せそうな喘ぎ声が聞こえてくる。そんなふたりに釣られて、僕もまた耐えきれなくなってきた。

「礼菜……くう……射精^だすよ……!!」

「はいいつ、お願いしますうううう♡」

ドクンッ

「はふ、はう……あうう……♡」

ドクン、ドクン、ドブン……

僕の精巢^{ナカ}から迸るモノを、礼菜は満足そうに僕を受精^ウけ止めてゆく。すると、ひとりで遊んでいた彼女の方も一緒に。

「ワタシも……はあ……ああ……っ」

ヌルっぽん、と前の方を引き抜くと……

ジヨロジヨロジヨロ……

ああ、これは確信犯か。膀胱^{オク}に溜まっていたものをそのまま潮吹^だし尽くしてしまった。僕の胸に強くしがみついていた礼菜だったが、その水音を感じてふうと一息。

「……やれやれですね。まあどちらにせよ、ずっとここで寛いでいるわけにはいきませんけど」

礼菜がズルンと腰を上げると、溜め込んでいたものが溢れ出す。その冷たさに内腿を少しモジモジさせていたが、すぐに出立を促した。

「ほら、移動しますよ。次はもう少しゆっくりできる場所にしましょうか」

「はい……」

優加さんから抜かれた二本は、それぞれファスナーのついた厚手のビニール袋に一本ずつ収納された上で元のポーチへ。そのポーチ自体も、腰にパチリと留められた。

「あたしもカバン持ち歩くことありますけど……全裸にウエストポーチって……カック悪くありません？」

ここまでは慌ただしかったこともあり手に持って来ていたが、いざ本来の用途として巻かれると……確かに、少なからず異様だ。

にもかかわらず、そんな怪訝な視線を受けた優加さんは……何故か、照れている。「えへへ……ありがとうございます……」

どうやら怒られたり蔑まれたりすると喜んでくれるらしい。あらゆる罵倒で悦びをもつて受け止められては、愚痴り甲斐もないだろう。これではもう、礼菜も小言を控えるしかなさそうだ。

さて、僕たちの野外プレイに他の人が参加するのは、これが初めてではない。学生の頃は、学校が山奥にあったこともあり、そこに通う女のコたちと、あんなことや、そんなことをそこらじゅうで繰り返り広げたものだ。

その際に、礼菜は相手に必ず同じ条件を出している。自分を含めた3P以上である

ことと、最も勢いのある一度目の射精は自分が受精けること——ただ、膣内射精の方は状況によって、礼菜も折れたりするけれど。

ともあれ、今回は初日ということで基本ルールだ。一日の初搾精りをマンション前にて済ませたことで、約束通り、僕は……優加さんと交わっている。

「えへ、えへえ……へあああ……♡」

どうやら、優加さんはバックが好きらしい。それも、自ら手押し車で歩きたがるとは。そのワリには呆気なくへばっている。道の真ん中でグツタリされるとマズイのだけど。

ただ、礼菜が焦らない限りは何の心配もいらない。誰かが近づいてくれば、すぐに教えてくれるはずだ。

「ほらほら、ナニやってるんですか。公園までまだまだですよ」

「はあん……すいませえん……♡」

いや、少しでも進む素振りくらいは見せてくれないと。優加さんは、硬いアスファルトに頬で突っ伏したままぐんにやりしている。なのに、自分のお尻を掴んで拡げて……挿入し直したアナルバイブでナニかしてくれと催促しているようだ。が、僕の両手は優加さんの腿を担ぐので精一杯なので、ここは礼菜に任せるしかない。

とはいえ。

「む〜む〜……う〜う〜……！」

まあ、尻穴から突き出したモノに触りたくはないよな。それでも、渋々。指一本でグリグリと押し込むように回すと、優加さんの膣内^{ナカ}がギューッと締め付けてきた。

「あぐつ、あぐああ……つ、ずびばせん……ずびばせん……♥♥♥」

ホントにこの人はずっとこんな調子なんだろうな……。意地悪く詰^なって欲しいのはわかるのだが、僕も礼菜もそういう趣味をしていない。うーん……適任者なら他に思い当たるフシがないこともないけど……。

そうこうしているうちに……何せ、ここはただの道端だから。

「はう〜……あまりのんびりもしてられませぬね。どうしましょう？」

礼菜はツンツンと靴の先で優加さんの脇腹を突いている。これには蹴られた方も不服なようだ。

「ああ……もつと……もつと強くう……」

逆に求められては、礼菜もこれ以上手出しはできない。

「もー、めんどくさいです。あたしが両腕を担ぐので、さっさとゴールしちゃいましょう」

先を急ぎつつも焦る様子がない、ということとは、接近者は徒歩なのだろう。かといって、油断はできない状況だ。

相変わらずへたれたままの頭の前に礼菜はお尻を下ろすと、脇のあたりをしつかりと抱えて――

「ん、しよっ、と」

何だ、この体位は。これまで奇抜なプレイに巻き込まれたことは多々あれど、ここまで間抜けな姿勢は初めてである。

優加さんも状況を把握してくれたようで、礼菜の腰回りにしつかりと掴まってくれた。が、身体が地面と水平になったことで、パイプが僕のお腹にゴツゴツとぶつかってしまふ。

「はっ、あふっ、あふっ、いいっ、いい……っ」

余程性感^{カン}じているのか、膣^{ナカ}内の締めも凄まじい。前へ進もうとする度に、ジェルジュルと吸い舐められていくようだ。そして、性感^{カン}度が高まれば、優加さんも興奮に任せて余計なことを始めてしまふ。

「ひゃうっ!? 舐めないでください! はうっ、はうん……っ♥」

この高さから顎を落とせば、さすがに怪我は免れない。ゆえに、礼菜も懸命に耐えているが……これは、僕の方が限界だ。ズチュ、ズチュ、と細かい動きで、先から根本まで撫で回される。その艶めかしい肉厚に求められて、括約筋^{カラダ}は応えずにはいられない……!

ギョプ……ッ！

これは何というか……トイレに急いでいる最中に漏らしてしまったような情けない感覚。しかも、一度射精始めてしまえば、落ち着くまで止まってくれない。歩きながらビュルン、ビュルンと膣内に吐き射精され続けている。それを優加さんもしっかりと性感じているようだ。

「はあんっ、ザーメン……メスブタマンコにザーメンありがとうございます……♡」
ビクっ、ビクッ、と背中が跳ねている。膣内の締めりも強くなっているし……これなら満足してもらえたはずだ。こうなってくるとむしろこのままぶら下がっていられるか心配にもなってくる。

「ぐえ、苦……っ、そんな、強く……!？」

どうやら絶頂た拍子に礼菜の脇腹を全力で抱きしめてしまったらしい。それでも離さず、何とか運搬は続いている。だが、それが収まるとすっかり気が抜けてしまった。「……コースケ君、コレ、運んでいってもらっていますか」

コレ、って……。あまりの醜態に、優加さんの扱いがどんどん酷いものになっていく。絶頂たことは礼菜もわかっている、これ以上無理して繋がっている必要もな

い。前方で抱えていた両腕をゆっくりと地面に下ろし……ああ、ここからは僕がおぶっていけばいいのかな。

「はあ、コースケ君、次からはもう少しまともな変態を拾ってきてくださいね」

付き合っている僕が言うのもナンだが、ここまで野外プレイにこだわる礼菜も正直いってまともではない。そもそも、まともな変態って一体なんなんだ……？

目的地である公園に着くと……へロへロになっている優加さんは広場のベンチにデロリと放置。散々なメに遭った礼菜は、気晴らしのためにも早く僕と抱き合いたいらしい。

「はうん……はあん……コースケ君……コースケくうん……♥」

腰を落ち着ける間も惜しんで立ったまま。むちゅうと唇を押し付ければ、すぐさま舌も浸食してくる。女のコの柔らかさを執拗に押し付けてくる様は、誘惑というよりむしろ発情か。実際礼菜は、こうして外で裸になると、興奮のあまり性感度カクセンも数段敏感になつてしまう。きつと、ここまで歩いてくる間もずっと燻らせてきたはずだ。それを肌と肌の触れ合いで発散させようとすれば、すぐに我慢もできなくなる。

「欲しいですう……コースケ君、あたし、はう……あたし、もう……っ！」

しかし、抱擁を解くこともない。僕をズイズイベンチへと押し込み、優加さんの隣

に座らされた。こうしてしっかりと上向きになったところで、礼菜は包み込むように跨ってくる。

「えへ、あたしをしつかり……抱きしめてくださいね♥」

代わりに、僕のこと抱きしめるから——そう言いたげな唇は再び唇で埋まってしまった。そして、下の唇も。勃起カタいところに軽く指を添えると、僕を自分の膣内ナカへと埋め込んでいく。

「ん、ふ、んふ、ん……」

こうして深く抱き合っているだけで、礼菜はとても嬉しそうだ。子宮口オクに届く男の感触をじっくり味わっているのだろう。

しかし、求めるものは快樂の絶頂に達しない。そこへと性感帯カラダを導くために、女の腰は自ずと動き出す。

「むふ、うふ、ん、んふう……♥」

もう身体の外側を撫で合うだけでは収まらない。その膣内ウチ側がわさえも絡み合い、快樂のためにあらゆる手立てを尽くしている。届くところにはすべてが届き、互いの性感は妥協を知らない。

「あつ、はうつ、あつ、はあつ……♪」

呼吸は荒く、ふたりは酸素を求めて口を離す。それでも、擦り付けるような胸と胸

の抱擁が離されることはない。

「いいっ、いいですう……っ、大好きですう……コースケ君、あ、あ、はあん……っ♡」

礼菜の鼓動は最高潮に達しようとしている。だが、そこに割って入ってくる者が。

「ふへ……輝山さん……ふへへ……」

抱き合う僕たちの横からドロドロと優加さんがまとわりついてくる。決して妨害にはなっていないのだが、せっかく盛り上がってきたところなのに水を差された感はない。まあ、いくら休憩中とはいえ、全裸の女のコを無視して楽しんでいた僕らも僕らだが。

「絶頂っ、そう……なので……邪魔……しないで、ください……っ！」

肘でゴスゴスと邪魔者の頭を突きながら、礼菜は懸命に僕にしがみついている。優加さんも天性のマゾなのか……ここで深入りはしてこない。相手が本気で激怒しない程度に叱って欲しい——その塩梅を心得ているようだ。

「それではワタシ、何か飲み物でも買ってきますので……」

ふたりきりになりたいだろうという礼菜を慮って、優加さんはさり気なく自ら席を外してくれると言う。隣から気配がなくなつたことで、僕たちの気分もより盛り上がってきた。

「いいですつ、大好き、大好きい……はううん……っ♡」

部外者の前では、やはり言葉を選んでいたのだろう。礼菜には目で周囲を窺う必要はない。僕よりはつきりと、その足取りを察知しているはずだ。

「えへ、えへ……コースケ君のおちんちん……大好きです♪」

礼菜がこのような言葉を口に出すのは珍しい。きつと、間近で乱れきっていた姿を魅せつけられて、思うところもあつたのだろう。だつたら、僕も。

「礼菜のおまんこも……気持ちいいよ」

自分の性器カラダを褒められて、礼菜はそこをキュウンと締めてくる。

「でしたら、コースケ君のせーえきで、あたしのおまんまん、愛して……愛してえ……はう、はう……ああ……っ」

その切なげな表情に、僕の精巢オクで燻っていたモノが……もう……っ！

ビュルツ！

「はうん！ 射精でてますう……っ！ あたしの……膣内ナカにい……コースケ君の……赤

ちゃん♡♡♡」

これで、今夜も三度目だ。さすがに勢いはなくなってきたものの、礼菜はちゃんと

性感^{カン}じてくれたようだ。腕の中にぎゅうと僕を収め、束の間の安らぎを満喫している。遠からず、優加さんも戻ってくるだろうし。

僕や礼菜は、基本的に裸のまま家から来ている。よって、財布の入る余地もない。なお、礼菜の方は靴にお札を仕込んでいたりする。が、これは虎の子の最終手段であり、少なくとも自販機で喉を潤すような使い方は先ずしない。まあ、普段は手提げカバンくらい持参しているのだけだ。今夜は初対面の相手ということで、身を隠せるようなものは何も持ち歩きたくなかったらしい。それが、礼菜なりの威厳の示し方でもある。今回は、圧倒的な変態力によって敗北してしまったようだが。

一方の優加さんは……さすがに、ポーチの中身はオモチャだけ、ということはないらしい。ちゃんと小銭も用意してきたのだろう。ただ、駅からここまでの道のりを思い出すと……自販機は五分くらい引き返す必要がありそうだ。もつとも、ここは優加さんの地元だけに、より近い場所を知っているのかもしれない。

と、考えていたのは甘かった。

「え……ちよ、ちよっとそっちは……!!」

ビックリとして、礼菜が僕の胸の中で声を上げる。どこかに想定外があったらしい。それはかなり深刻なようで、余韻すらかなぐり捨てて、僕を抜き落とすように椅子から下りる。

「マズイですよ！ 確かそっちにはコンビニが……！」

「えっ？」

それは僕も覚えている。最も近い自販機は、先程曲がってきた十字路を直進した先にあつた。が、その手前にはコンビニが二四時間営業中だったはず。その前を堂々と通れば、視姦^みられてしまう可能性は極めて高い。土地勘のある優加さんがそんな無茶をやらかすはずがないと思つていたけれど……あの大胆さなら、それさえも些細なことか。

「もうっ！ こうならないよう、わざわざあたしたちがご近所に出向いてきたのが台無しじゃないですか！」

見知らぬ土地で彷徨^{うろつ}くのも不安だろう、という札菜なりの配慮ではあつた。が、その甲斐なく、優加さんは進路を誤つてしまったようだ。いや、あの人なら店内から覗かれても平然と——いや、むしろその方が興奮するのかもしれない。が、警察のお世話になるようなことがあつては僕らまで巻き込まれてしまう。

止めるにせよ助けるにせよ、僕らは優加さんの後を追いかけるしかない。札菜は素っ裸であることを忘れてるように、公園から表の通りへと飛び出していく。その足取りに迷いが無いという事は、周囲に行人人もいないようだ。

あの人をひとりで行かせてから、まだ三分も経っていない。歩調も緩慢だったし、

走ればすぐに追いついた。

しかし――

「え」

こんな真夜中である。遠くにいる人影を視認することは難しい。そこに、明るい光でも差していなければ。だからこそ、わかる。誰かが、例のコンビニへと入店しているのが。しかし、僕の見間違いでなければ、その姿は肌色の塊だったような気がするんだけど……。礼菜も自分の目を疑いたいようだが、それと合わせて気配察知でも認識してしまっている。

「と、とにかく行ってみましょうか……」

「ああ……」

もし、あの店内で騒ぎになっているような動きを感じていれば、礼菜とて近づくことはしない。何しろ、僕たちだって誰かに見つかればマズイ格好なのだ。ゆえに、どこまでも冷静に、慎重に。

「……店内には店員さんと優加さんのふたりだけ。この距離感……おそらく接触していますね。どちらかに逃げる様子がなければ、その立ち位置は合意の下。しばらく静観してみましよう」

僕にとってはすでに危険な路上だが、礼菜は臆することなく僕の手を引いていく。

それでも、露出プレイ中であることには変わりない。裸になって歩くだけでなく、目的を持って調査している——そんな、面白半分な高揚感。埋竹^{まいたけ}礼菜^{れいな}という女の口は、野外におけるあらゆるシチュエーションを楽しめしてしまうのかもしれない。

そうして、僕たちはすぐにそこへと辿り着いた。看板を見上げてみれば、そこはいわゆる大手フランチヤイズではなく個人商店。本部が縛り付けるための複雑なルールもなく、ここでは店長が正義なのかもしれない。あの痴態で合意を得られたのなら、他の客が入ってきてても、程よく匿わせてもらえるはずだ。

中の様子はとても気になる。が、僕たちにそこへ立ち入ることはできない。ただ、礼菜もすっかり安心したようで……すると、すぐに悪癖が出てきた。

「コースケ君、あたし、ただ待ってるだけなんてできません……♥」

勃起^たち上がったところを握り締め、もう一方の手で僕の指を自分の股の間へと誘導する。唇を尖らせるなら、同じ身体を礼菜のそこへ。シコシコクチュクチュと激しめの前戯で愛し合えば、互いを欲せずにはいられない。

公園で、充分抱き合ったから——今度は自ら背を向けて、可愛いお尻を突き出してくる。だから、僕も誘われるままに恋人の膣^ナ内^カへ。

「はう……はうん……コースケくん……もつとお……♪」

外で裸になると、極端に性感^カじやすくなってしまう……それが、長所とも短所とも

呼べない礼菜の性癖だ。後ろから撞かれる衝撃は膝や腰をも砕いてしまい、電柱にしがみつ়くことで何とか耐えている。

礼菜から力を奪い、集められているのは女のコとしてのその一点。その膣内側に込められた圧は、コンクリートの柱を抱きかかえる両腕よりも強まっているかもしれない。そんな膣内で男を愛されているのだ。そう長くはもちそうにない。

「う、くう……礼菜……射精そうだ……っ！」

女のコの鳴き声はどこまでも可愛らしいのに、膣だけは本当にシビアだ。

「あつ、はっ、はいっ……はううん……♡」

露出しながら交わっているときであれば、いつでも孕ませてくれていい——礼菜はそう言うが、結局室内では抱かせてもらっていない気がする。なので、僕たちが事成す際には、結局いつもこんな調子だ。

「礼菜……射精……っ、射精すよ……！」

「はうう……お願い……しますう……っ♡♡♡」

お互いそろそろ限界が近い。快樂の瞬間はもうそこまで迫っている。
だが。

ピンポン……ピンポン……

「はうっ!？」

これまで気持ちよく包み込んでいたところさえも引き抜いて、礼菜は怯えるように電柱の陰に身を隠した。それは、自動ドアを開けたのが優加さんだけではないとわかっていたのだろう。中から出てきたふたりは、離れる前の僕たちとまったく同じ体勢だった。女のコのお尻に、男がくっついていてる。

甘い鳴き声を上げているところまでも瓜二つだ。

「はっ、あぁん……輝山さぁん……録画止めてもらいましたよぉ……♪」

それを聞いて、礼菜の空気が少し変わる。興味津々に店の方へと顔を出すも……やっぱり胸は隠したままだ。

「恥ずかしい?」

露出仲間の前ではいつも堂々としていた礼菜なら、露出プレイ中の店長に視_み姦_{かん}られるのも許容範囲……とはいかないらしい。

「優加さんの彼氏ならともかく行きずりの相手じゃ安心してできませんし……何よりあのオジサン、服着てるじゃないですか!」

自分側かの判断基準として、裸か否かがあるようだ。自分が楽しむだけでなく、パートナーにも楽しんで欲しい——そんな思いがあるらしい。露出している女のコを愛

であるのではなく、自分も露出して欲しい、という。

だが実は、僕自身に露出癖はない。それは、礼菜もまた承知している。それでも、こうして僕が裸になるのは、礼菜が喜んでくれるから。女のコが頬を赤らめ嬉しそうに微笑んでくれることが、僕を何よりも嬉しい気持ちにしてくれる。

それが僕にとっての一番の幸せだった。

ということだ。

男として堂々と先陣を切り、その背中に小さくなった礼菜がびったりとくっついてくる。いや、僕とて恥ずかしくないわけでもないのだが。それでも、路上でたむろしているよりは安全——などと考えているのは僕だからだろう。礼菜はコンビニに全裸で入店するという非日常感に少し高揚しているようだ。

「ほう、ほう……お邪魔しますう……♪」

一足先に店内へと引き返していた優加さんたちはレジの前あたりで楽しんでいるので、僕と礼菜は雑誌コーナーの方へ。すると、文具の棚が壁になってくれたことで、礼菜も少し元気になったようだ。いや、外からは丸見えなのだけだ。開けていることに対する心配は、礼菜にはない。

「うふふ、お外でえっちする漫画はありますかね♪」

どちらかというと、本の中身よりも、全裸で成人向け雑誌を物色していることに興

奮しているようにも見える。

だが。

「……おっと、車が近づいてきますねー……」

となると、窓際で突っ立っているのもマズイ。しかし、そこは礼菜である。通過していく車であれば誤魔化せると踏んで、場所は動かさずしゃがむだけ。いや、しゃがむどころか尻餅をついて……堂々と寝っ転がってしまった。

「成人向け売り場で、成人向け行為……はううう……お願いしますっ！」

床は硬くて痛くないはずはないのだが、車道と比べればまだマシ、ということなのかもしれない。それに、まあ、礼菜も筋金入りの露出狂だ。このような環境にも慣れている。

と、いうことで。

「はう、ああっ、はあん……♪」

右側には成人向け雑誌の棚、左側には避妊具の陳列。そんな性的な商品に挟まれて、僕たちが行っているのはまさにソレか。

「ん、ん、あうん……っ」

さつきは後ろからだったからこそ、こうして前から抱き合えばしっかりと。足を投げ出して店の物を蹴飛ばさないようにする意味もありそうだ。靴の踵を腰の下に感じ

ながら、僕は振りほどく勢いで礼菜の子宮へと打ち付ける。

そこに……再び別の車が店の前を通り過ぎていったようだ。だが、礼菜の抱擁は解かれぬ。流れていくヘッドライトを横目に見ながら、僕たちの愛は紡がれてゆく。

「はっ、あつ、ううん……やあ……」

嬉しそうな恋人の顔を見ると、僕もまた嬉しくなってくる。もつと悦ばせるために、僕はさらに力を込め、その返礼は膣内によつて。

「あはっ、コースケ君……あたし……絶頂ちやいそう……ですう……」

頭を振りながら、礼菜は周囲を確認しているようだ。それは、人の気配ではなく、ここがコンビニの店内であることを。

「絶頂……絶頂ます……あ、あ……ああ……」

ビクンっ！

礼菜の腰が激しく浮き上がり、膣内の締め付けも最高潮を迎えている。ここまでできたのは初めての経験のはずだ。さぞ満足していると思いきや……

「んー……やっぱりこれじゃあ家の中と変わらないかもですねー」

「何イ!？」

まさかの欲求不満だど!!

「だってほら、お店とはいえ店長さんからの特別待遇では、おうちにお呼ばれされて
いるようなものですし」

「そう……なのか……」

僕にはこの一面窓ガラスというだけでも緊張するが。なまじ気配察知があるだけに、
外に誰もいなければ遮蔽された壁と変わらない……のかもしれない。

だが、そんな小言を聞き逃がせない者もいた。この場を借りてくれた立役者の登場
である。

「まあまあ、そう言わずに……」

今度は店長さんもくつついてきていない。ひとりで這い寄ってきた優加さんは、抱
き合っていた僕と礼菜の間に顔を突っ込んできた……!!

「ちよ、ちよ……コースケくんはお貸しする言いましたけど……!!」

順序としては、優加さんに譲る番だという自覚はあるらしい。とはいえ、こうも強
引に割り込まれては……と、思いきや!!

「はっ、はうっ!!」

優加さんの目当ては男性器僕ではない。顔を下に向けたまま、むしゃぶりつくのは、
女性器礼菜の方……!!

「はむ、はむうん!? やっ、もおく……っ!」

女のコが女のコにこういうことをする光景を見るのは初めてでもなかったりする。なので、多少は驚きつつも、優加さんならヤリそうだな……というのが正直な感想かともあれ、ここは本人たちのやりたいように楽しませるべきなのかもしれない。そこで、早々に立ち退こうと腰を上げてみるも、寝たままの礼菜の方から抱き止られてしまった。

が、ただ止められたわけでもなく。

「コースケ君、コースケ君……はうう……♥」

うっとりとした声に呼び込まれながら、僕は膝立ちのまま礼菜の脇の方へ。顔へと近づいているといってもいい。誘われている理由はもちろん、上の口で僕を味わうため。

「はむん♪」

口元へ向けて引っ張られて、僕は礼菜の頭の上に四つん這いになっている。優加さんが見上げれば、そこにあるのは僕の尻か。あまり見てくれの良いものでもないのですが、そのまま女のコ同士で楽しんでいて欲しい。

「こんなにヌレヌレ……性感^カ感^ンじてる……」

「む……むふう、むふうん……っ」

舌使いからも、礼菜の悦びが伝わってくる。こんなに激しく求められると、男としては、やっぱ嬉しい。

「れる、れむう……コースケ君……はう……コースケくん……❤️」

竿の方だけでなく袋の方も手に包み、尻まで健気に揉みしだいてくる。下腹部に迫る快感に、堪らなく夢中になっているようだ。

「ウフフ……悦んで……くれてますよね……？」

「ひやううう……っ!!」

礼菜の声色が変わったので僕は背中を捻って覗き見てみると……舌だけではなく指までズッポリと挿じ込まれている。それも、ちゃんと本人の様子を窺いながら。礼菜はイマイチと言いながらも、それなりに興奮はしているのだろう。このような状況では、自分の性感を隠すことができない。

「はうっ、はうんっ! らめえっ、そんなにシちゃあ……っ」

いままさに一度絶頂^{イッ}ばかりだ。もしかすると……溜まっているのかもしれない。優加さん、その……これ以上やると、お店に迷惑^{イッ}かかるかも」

不運も、ここは雑誌売場である。道端のように乱れるわけにはいかない。

だが。

「ウフフ……構いませんよ。全部……飲愛^{イッ}んであげますから」

そこまでできるのか!? という疑いを払拭するように、優加さんの手付きがさらに激しくなってくる。例え嘔くと言われても、それで臆することはない。

「あた……あたし……むううううっ!!」

力強く僕を抱きしめ吸い付く礼菜。それで、優加さんも手応えを感じたのだろう。ジュプつと引き抜くと同時に、大きく口を開け……!!

「はうんっ、はうん、はあああああ♥♥♥」

ジヨロリ……っ!

最初はきちんと受け止めようとしていた。が、脈打つ礼菜の腰に合わせて上へ下へと定まらない。結局、その嘔き出す根本に食らいつく。

「む、むふ、むふ……」

さすがに飲愛^のみきれてはいないが、顔面に直撃させることによって派手に飛び散る。事故だけは避けられた。

「はう、はうう……やっちゃいましたあ……♥」

啜えていたところにちよんちよんとキスをしながら、そんな謝罪めいたことを口にする。だが、心底満足してくれたようだ。

とはいえ……。

「申し訳ございませえん……こぼしてしまいましたあ……♡」

床の水溜まりをベロベロと舐めるのは……さすがに、衛生的に問題がある。これは、僕にとつても他人事ではない。何故なら、夜はまだまだ続いていく。陽が昇る時間まで、僕らは……性的なパートナーとして抱き合い続けることになるのだろうか。

「優加さん……掃除は僕がやっておきますから、もう少し礼菜を楽しませてあげてください」

と、モツプを借りようとしたのだけれど……！

「は……はうん……人が……人が来ちゃいますう……♡」

二度連続で絶頂イカされて、礼菜は不覚にも夢心地だ。これは……ヤバイぞ……！

濡らした床は隠しようがない。とにかく僕らの裸身だけは目撃みられるわけにいかず、礼菜を抱えて奥の方へと身を潜める。危険嗜好の優加さんではあるが、無駄に人目につくことなく黙ってついてきてくれた。そこから静かに、やって来た客の動向を窺っている——

「トイレあります？」

幸いにも買い物目的ではなかった。当人も腹部に危機的要因を抱えていたようで、カウンター横の個室へと一直線。その隙に僕たちは……どうしよう？

迷う間もなく、下半身をしまいこんだ店主が様子を見に来た。僕はさり気なく礼菜を抱きしめ、その肌を何とか隠す。とはいえ、話しかけてきた相手は僕ではなく優加さんの方か。

「嬢ちゃん、さっきの一発に床掃除まで含めておくから……さ」

ふたりの間でどういう取り決めになっていたか、その詳細は聞いていない。が、一発ヤラせるからアレコレと優遇してくれ、と頼んだのだろう。防犯カメラまで止めてもらったり。とはいえ一般客も入ってきたし、そろそろ出ていってくれ、ということか。近所に変な噂が立っても良くない。

そのあたりの事情も察して、優加さんも大人しく身を引く。

「はい……また……^ナ膣内^カ射精^ダしてくださいね……♥」

いつトイレから客が出てくるか、新たな客が入ってこないか——優加さんがそれを恐れることはない。裸であることさえ感じさせず、自然体でスクリと身を起こす。

さて、礼菜の方も担ぎ出さなくてはならないか、と思ったが……

「トイレの方に動きがあります。もう幾ばくの余裕もなさそうですね」

そろそろ足腰も回復してくれたらしい。時間が深夜だけに、ここに留まるより外に出た方が安全、と踏んだようだ。気配を探れる礼菜ならではの判断ではあるけれど。

「……やれやれ、今後はこのかた用のルールを決めておかなきゃいけないかもしれま

せんね」

そんな小言をこぼしながら……僕は自動ドアから退店していく。実に、自然な振る舞いで。揃って一糸まとわぬ姿であることを除けば。

礼菜とて、他者から引かれる性癖を持つがゆえに、他者の性癖についても受け入れる懐の広さを持っている。その礼菜さえ引かせる優加さんと、このような関係にもつれ込むようになったキツカケ……それは、わずか一週間ほど前のことだった。

露出少女と痴女の
モラルなき戦い!

裸族忍者シリーズ

いつでもどこでも脱ぎたがる

露出少女・埋竹礼菜

大好きな男と子供を成すことに

人生を懸けて迫ってくる痴女・鷹池。

そんな三人に翻弄され続ける

流され男子の痴情まみれの官能ライトノベル!



詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/>

Comicalize

忍者の愛した露出狂

私の彼氏は露出狂——
埋竹雛菊は恋人の悪癖に
嫌気が差しながらも、
そのとき垣間見せる男らしさに
どうしても惹かれてしまう。
本気の彼とぶつかるために、
彼女もまた、深夜の公園で
一肌脱いでみるも——

官能ライトノベル『忍者の愛した露出狂』が
ついに堂々のコミカライズ!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/ninja/0001/>



応援特区 こづこは 子づくり

—略してKKO問題—

老若男女の隔てなく、
ただひたすらに成果主義——
それが、地下研究所における唯一の掟。
だが、研究員番号386——ミハルは
不毛な研究の毎日に嫌気が差していた。
そんな彼女に命じられたのは、
地上を蝕む少子化問題に関する実地調査！
ミハルが向かった先で虐げられていた
金のない (Kanemonai)
キモい (Kimoi)
オッサン (Ossan)
略してKKOを救うためにミハルが見出した
ただひとつの希望とは——

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/dystopia/>

いじめ
 られっ子の
 処方箋

正義の
 投与の
 行く末は

イジメの起きない
 イジメ小説!?

イジメ撲滅運動——
 とある高校で突如始まったこの騒動に
 埋竹雛菊は意図せず巻き込まれていく。
 しかし……
 そもそも、イジメとは何なのか？
 そんな疑問に突き当たる。
 悩み抜いた末に、辿り着いた結論とは……？
 そして、運動を取り仕切る
 学級委員・雨弓来未の真の目的とは……？
 イジメと向き合うすべての人に送る一冊です。

コミカライズ版 総集編第2巻
 各配信サイト様より
 好評配信中

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/presc/>





sorega kanojo-no
それが彼女の

未知なる世界で
どう生き延びる...?

生存戦略!

seizon senryaku

オトナ向けの
番外編的短編集
『それが彼女の
性交戦略!』も
こっそり公開中!?

学校が異世界に飛ばされた!?
それでも見知らぬ大地の上で
誰もが遅く生き延びてゆく。
ある者は『力』で、
ある者は『智』で、
ある者は『心』で、
ある者は『愛』で。
そして……
彼女たちは元の日常に
帰ることができるのだろうか……!?

リユーカ編
コミカライズ版も公開中!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/4girls/>

アストラルツインズ

兄は国を襲い、女王は国を滅ぼす

アストラルツインズ

兄は指揮官に、妹は銃殺刑に

テロリスト 迫り来る**反逆者**
プリンセス 担がれる**民間人**
そして... **アホの子**
掻き乱す問題児!

からアストロ!?

妹はお風呂嫌いで
女王は珈琲が大好き


アストラルツインズ
後日談的R-18短編集!

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

コミカライズ計画も
全力始動中!

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/astra/>



遺伝子操作によって先天的な才を作り出す『ハイクラス』
薬学によって後天的に才を伸ばす『マイト』
ふたつの主義主張は、破壊と暴力を伴い鋸迫り合う。

『マイト』に所属しながらも
薬物を受け付けけない体質の少年・サカタは
『ハイクラス』でも『マイト』でもない
謎の少女と出逢い、そして――

315

—奪われた記憶—

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/lossmem/>

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止



うさぎさんごらこちゃん

セイ
アイ
アム
ズ

食べて寝て

交尾する!

ついに訪れた
家族の離散——
生きる道を失い
故郷である兎ヶ島へと
帰ってきた里倉和兔。
しかし、そこは——
老若男女問わず誰もが発情し、
異性を求める色情の地と化していた!
裸の女の子たちに迫られて、
最初は戸惑う和兔だったが、
次第に住民たちの勢いに
流されてゆく。
しかし——

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/sar/>

オンナ
たぎる♀に

おびえる♂
オトコ

乳を出そうが、尻を出そうが、
女の身体は贅肉扱い。
一方、成人向けコーナーには
半裸の男優ポルノがズラリ——
女が迫り、男があしらう、
そんな世界があったとしたら……？
価値観・身体づくり・社会システムに至るまで
真面目に考えてみた物語です。

リビド〜
男女の性衝動が反転した社会とは
リバ〜サル

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/rev/>

僕と私の 露出日記

The diary of Sleeping under the stars for Ours

自然の中で育ち、
裸で野山を駆け回るのが
好きな少年。
非日常を求めて裸になり、
その快感に
目覚めてしまった少女。
孤独に背德的性欲を
膨らませてゆく二人だったが、
ついに――

立派に
育った
露出癖

わたしとあなたの
露出交換日記

スピンオフでも
野外で全裸！

野外で裸に
なりたい男と
他人の痴態を
覗きたい女。
出逢ってはならない三人が
出逢ってしまい――

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>

ゲーム会社でつくった
ゲーム

ただシナリオを追ってだけで
ゲームと呼べるのか？
ボタンを連打するだけでゲームなのか？
そもそも、ゲームとは一体何だったのかを
考えるための一作目です。

ゲームって ナンだ？

ゲームセンターで
つくったゲーム

ゲームで勝つことに必要なのは、
有利な戦略を選ぶことか、
有利なゲームを選ぶことか、
有利な相手を選ぶことか——
そもそも、ゲームに勝つとはどういうことかを
考えるための三作目です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>

空色書房

Sleeping under the sky



大学を卒業し、システムエンジニアとなった^{空色書房}輝山工祐。
しかし、そこは彼が思い描いていた開発環境ではなかった。
失意と妥協の中、同僚・^{ゆづか}優加から持ちかけられたゲーム制作共同計画に
難色を示す輝山だったが……

6年にわたり繰り広げられてきた
裸族忍者シリーズも今作にてついに完結！